

---

# 許可求めの談話行動における「事情説明」の位置

## The Location of the Reason within the Speech Act of "Asking for Permission"

星 圭子

Keiko Hoshi

---

### 要旨

本研究の目的は談話行動としての許可求め談話において、依頼の談話行動についての先行研究を参考にしつつ、談話を構成する要素を抽出し、その中の「許可を直接求める表現」と「その事情を説明する部分」の前後関係について、日本語母語話者は意識的に選択しているのか、しているのであれば、それにはどのような配慮的要因が関わっているのか、どのような意識で選択しているのかを明らかにすることである。本研究では、日本人大学生を中心とした33名を対象に、会話開始から事情説明までの許可求め会話の前半部分のモデルを提示し、その中のどこに用件としての許可求め表現を入れるべきかという質問紙による調査を行った。その上で、結果を上下関係・親疎関係・用件の負担度別に集計しカイ二乗検定を行った結果、親疎条件と用件の負担度条件で有意差が認められ、相手が親しくない場合は用件を先に、相手が親しい場合は後にする、また、用件の負担が大きい場合は用件を後に、大きくない場合は先にする、という傾向が見られた。同時にその選択の理由についての自由記述回答では、用件を先に述べる場合は論理性重視、用件を後に述べる場合は共感重視といえる傾向が見られた。

●キーワード：許可求め表現／談話構造／日本人大学生

### 1. はじめに

日本語教育の会話指導において、ある機能を果たす談話の流れや構造の指導が意識されるようになって久しい。多くの会話テキストでは「依頼」「許可」「勧誘」など言語機能によって章が分けられ、それぞれにおいて、場面にあわしい会話になるよう、典型的な談話の構造が「モデル会話」として示され、それを形作る要素が「表現」「ストラテジー」などの用語で紹介されており、それらを話すべき順序が「フローチャート」として流れ図で示される場合もある。

授業の中ではそれらの表現やストラテジーを練習し、モデルとは別の場面を設定してロールプレイを行ったりするが、学習者によるロールプレイにおいては、母語話者である教員にとって違和感のある談話の流れが出てきがちである。文単位の表現の正確さや丁寧度の適切さなどの誤りも違和感を呼ぶものになるが、それだけでなく、談話の構造そのものに違和感を覚えるケースも多々見受けられる。必要な要素が欠けている、不要な要素があるということのほかに、話の進め方、つまり各要素の出現する順番に違和感を覚えることも多い。日本語母語

話者はどのような順番が適切だと判断するのか、ロールプレイ指導の際は明確に示す必要がある。

本研究では「許可求め」の談話をとりあげ、日本語母語話者はどのような構造を自然だと感じるのか、特に許可を求めたいとする理由を相手に伝える「事情説明」と、典型的には「～してもいいですか」のような言語表現を使って行われる「許可求めの表明」との前後関係に焦点を当てて検討する。

### 2. 許可求め行動とは

『新版日本語教育事典』において、談話行動は「話しことばの『談話』に限定し、複数の発話を連続させてまとまりをもった構造の言語表現を作り出し、自らの意思や感情、客観的な事実などを表現したり、他者との間で相互にやりとりしたりする言語行動 (p.480)」と説明され、それがプロセスであり複数の発話でまとまりをもった構造を持つことが示されている。

今回取り上げる「許可求め」はそのような談話行動の一つであり、謝 (2005) では、「相手に対して、自分が行為を遂行することを認めてもらうように働きかけるこ

と (p.118)」、田中 (2004) では「その『意図』を持つ『主体』が、『自分』のために『自分』が行う行為／行いたい行為について、関係者である『相手』の許可／了承を得ようとする行為 (p.126)」と規定されている。

以上より、本研究では談話行動としての「許可求め行動」を以下のように定義する。

- ・自らが行動することを他者から認めてもらうことを「求める」行動としての「他者への働きかけ行動」
- ・複数の発話を連続させてまとまりをもった一連の談話行動であり、その一連の流れ全体によって許可を受けるという目的を果たそうとするもの

### 3. 談話構造についての先行研究

一連の談話行動の構造を理解するために、それを要素に分割して分析しようとする試みは、談話の目的に対してどのような要素が必要とされるか、言語によってどのような違いがあるかなどの解明を目的に、依頼行動、誘いの行動、断り行動などについて研究が多く行われている。そのうち依頼行動については、発話行為論、談話分析、会話分析、ポライトネス研究などの立場から、特に数多く行われている。ここでは依頼行動における談話行動の構造の研究について概観し、その枠組みを許可求め行動の分析に生かしたいと考える。

本研究では、一連の談話行動をさまざまな構成要素が配列されたものとしてとらえ、その構造を「談話構造」と呼ぶこととする。

#### 3-1. 依頼行動を構成する要素と流れについての先行研究

ここでは、依頼談話に関する研究を概観し、どのような要素が挙げられているか、その要素の有無や選択についてどのようなことが研究されているかを確認する。また、その要素の使用順序についてもどのような研究があるのか確認する。

談話の構成要素については、発話をその機能ごとに分割する単位として、水谷 (1880) の「ディスコースユニット」、ザトラウスキー (1993) の「話段」「発話機能」、藤森 (1995) や生駒・志村 (1993) で使用された「意味公式」などの単位を用いて、依頼談話研究でもさまざまな研究が行われているが、どのような構成要素が選択されやすいかなどについて言語によって違いがあることが、これまで明らかにされている。

猪崎 (2000) は、ザトラウスキー (1993) を参考にし、依頼の談話を「話段」の概念を用いて区分、「発話機能」に分類して、日本人同士・日本人とフランス人の接触場面の分析を行った。その結果、日仏で「予告」の話段のあらわれ方が異なること、「先行発話」の話段において日本人は「情報提供」、フランス人は「情報要求」を行いがちであること、さらにフランス人の談話ではその「情報要求」が「依頼」の間接的な表現として機能する一方、日本人同士では「依頼」が直接的に示されることが多いために、日本人はフランス人の情報要求による間接的な依頼に気づきづらいことなどを明らかにしている。

柳 (2004) は依頼談話の流れを「開始部」「本用件部」「終了部」に分け、ザトラウスキー (1993) の「発話機能」の分類を参考に談話を分割し、依頼談話の「構成要素」における日韓の違いを分析している。その結果、日本語では「本用件部」の「本件導入部」において、「話題予告」「前提確認」が多用されて相手の様子や都合を確認しながら進める談話展開をとりがちである一方、韓国語ではそれほどではないこと、「本用件部」において、日本語では「条件」「謝罪」を多用して相手の感じる負担を減らそうとし、韓国語は「補償」「感謝」を使用して相手の感じる不安を埋め合わせようとする、と述べている。

構成要素の選択だけでなく、出現順序のパターンが言語によって異なるとする研究も複数みられる。

山口 (1997) では「発話類型」を抽出し「意味機能」別に分類して、発話行為のストラテジーの判断基準の日中韓の違いを分析している。その結果、依頼内容が「労力・時間の提供を求める」ものである場合、「同等・親しくない」「目上」の依頼対象に対して台湾と中国は謝罪してから依頼する【謝り】先行型ストラテジーを使用することで丁寧な印象を与えようとする一方、日本人は「目上」の相手に対して、【配慮】先行型ストラテジーにより相手の状況への気遣いを見せようとする指摘している。

徐 (2007) は依頼会話の【先行部】(依頼側が依頼を行う意図を持って話題を切り出すところから依頼を明言するまでの談話の部分) について日本人母語話者と台湾人のロールプレイ談話を「意味公式」に分けて分析し、日本人同士は【先行部】を相手の状況を質問することで始める【相手の状況先行型】というパターンがはっきり見られたのに対し、接触場面と台湾人同士では、それよりも自分の苦境を説明することで始める【苦境の説明先

行型】のほうが多く見られたとする。

池田他(2000)は、「依頼部分」の構造において、日本人による日本語談話資料(JJ)、中国人による日本語談話資料(CJ)、中国人による中国語談話資料(CC)すべてで、一般的には「内容表示(依頼の前置き)→情報提供(依頼の状況説明)→主依頼」の流れで依頼が行われるものの、JJはすべてその流れであるのに対し、一部のCCとCJには「主依頼→情報提供」という構造が見られたことを指摘した。

以上、依頼談話の構造を機能的構成要素によって分析したこれまでの研究は、分析単位の定義や名称はそれぞれ異なるが、それでも、その構成要素については一定の共通性が認められ、また、言語によって構成要素選択と順序が異なることが示されてきている。また、これらの研究はそれに違反することによって誤解や不快感が生じる可能性にも言及している。

### 3-2. 「依頼行動」の談話構造と「配慮」についての先行研究

構成要素選択と順序における規則に違反することが、相手に誤解や不快感を生じさせる可能性があるということは、談話構成要素の選択には何らかの配慮の意識が関わっているということにつながる。

「配慮表現」の定義については、「敬語表現」「ポライトネス」との違いを明確化した研究もあるが(彭2005)、杉戸・尾崎(2006)においては「配慮」を狭い意味での敬意表現研究にとどまらず、「会話場면을構成する人的要素や場面的要素に対する(p.2)」ものであり、「コミュニケーションにおける言語使用を背後で支える各種の意識や心配りを表す語(p.2)」と位置づけ、配慮表現をより広い概念にとらえようとしている。

同様に、三宅(2011)でも、「配慮言語行動」を、「対人関係や場面に留意して行う表現や行動を総称して言う(p.4)」「敬語やポライトネスを含むが、対人配慮に関わる言語以外の要素を含む極めて広い意味で使う(p.4)」と定義し、プラス方向だけでなくマイナス方向への配慮(軽卑語等)、表面上表れる表現や行動選択に関与する意識や態度、それらに影響を与える文化の特徴も考慮の対象であるとしている。

山岡・牧原・小野(2010)では消極的ポライトネス・積極的ポライトネスの両方を含み込んで一般化する定義として、配慮表現を「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮

して用いられる言語表現(p.143)」としており、配慮の目的を対人関係の維持としている。

生田(1997)は「ポライトネス」と「配慮」の関連について「ポライトネスは、当事者同士の互いの面子の保持、人間関係の維持を慮って円滑なコミュニケーションを図ろうとする社会的言語行動を指す。その意味では、ことばのポライトネスは『配慮表現』、言語的『配慮行動』などと呼ぶ方が適切かもしれない(p.68)」とした上で、「配慮」の対象について「対人配慮、つまり相手に対する配慮だけではない。話者自身の面子保持、さらに両者の関係維持に対する総合的な配慮が含まれている(p.68)」と述べた。そして、「ことばのポライトネス」(=配慮表現)を考える上では、文表現レベルの敬語表現にとどまらず会話の進行のやり方についても考える必要があるとした。

本研究では、社会的な関係を良好に進める目的で、さまざまな言語要素や言語以外の要素、つまり対話場면을構成する要素全般に対して気を配り、その場で自分が適切だと思う言語行動を選択するという、「待遇」や「ポライトネス」も含む広い意味での「配慮」の概念を採用した上で、人が配慮の結果として言語行動を選択する際に、談話構造もその一部として選択していくことについて考察する。

その上で、以下、依頼談話の構造と配慮や待遇の関係についての先行研究を概観していく。

蒲谷・川口・坂本(1993)は、依頼行為を一連の言語・非言語表現の流れとしてとらえ、それを分析するために考慮すべき基本的要素として「相手」と「用件」という2要素を挙げた。また、それらに対する判断により一定の表現パターンを作る「方略」が機能する過程をわかりやすく提示するため、それぞれのレベルを-1~+2の4段階の値で判定し、それらを加算した「コード」を設定した。「コード」とは、「相手レベルと用件レベルを考慮に入れた上でどのように談話の流れを作るか、どのような表現のパターンで依頼という行為を行うかを示したもの」であるとし、その値は個々の表現自体の丁寧度を決定するのではなく、具体的表現の集合、つまり談話が担っていると考えられる「機能」の流れのパターンとして示すとした。以下の数字はコード値、説明はコード値に対応する展開パターンである(p.59)。

{コード-2}:(原則として依頼ではなく、命令・指示・質問となる)

{コード-1}:<指示・質問・依頼>

{コード 0} : <切り出し> → <相手の反応確認> → <質問・依頼・状況説明>

{コード+2} : <切り出し> → <依頼可能性確認> → <反応確認> → <状況説明> → <質問・依頼>

{コード+3} : <切り出し> → <依頼可能性確認> → <反応確認> → <言い訳・お詫び> → <状況説明> → <質問・依頼>

{コード+4} : (原則として依頼はしない)

この「コード値算定表」では、コード値が上がると談話構造の構成要素が増えている。つまり、このモデルは談話の展開の仕方、つまり談話構造を変化させることで、相手や用件に応じた丁寧さが表現されるということを示している。

柏崎 (1995) は水谷 (1980) の「ディスコースユニット」という単位を用いて依頼談話を機能ごとに分割し、どのような要素が含まれる談話構造が丁寧と感じられるのかについて日本人大学生に質問紙で調査を行い、5段階の丁寧度評定によって検討した。その結果、同じ依頼の文型を使用した談話でも、「依頼の理由」「相手への配慮」など談話の構成要素の有無によって丁寧度評定が異なること、また、逆に、文型の丁寧度が違っていても談話パターンが同じであれば談話全体の丁寧度評定には差が見られないことが示唆されたとし、依頼文の丁寧度の違いよりも、むしろ談話がいかなるステップを踏んで進んでいくかという談話パターンの違いが、談話の丁寧度評定に影響を与える結果となったと述べている。

他にも、熊谷 (1998) では、国立国語研究所の1972年愛知県岡崎市の調査において、依頼談話の回答を発話機能の観点から単位分割し、11ストラテジーを抽出して分析した。その結果、丁寧な言語形式を用いたグループのほうが談話のストラテジー使用数が多いという結果が得られ、ストラテジー使用数も言語行動の丁寧さの一つの指標になり得ると指摘している。

以上の研究では、依頼の談話行動においては、言語形式そのものの丁寧さだけでなく、談話構造の要素数や構成要素の多少が、談話行動の丁寧さ判定に影響を与えるということが示されている。

#### 4. 依頼行動と許可求め行動

これまで、「依頼」談話構造において、その構成要素や順序と、配慮との関連がある程度明確になっていることを見てきた。この研究成果が「許可求め」行動の談話構造研究にも適用できる可能性について探りたい。

#### 4-1. 日本語教材と教師用指導書の「依頼」と「許可求め」の構造

上記の問題について探るため、日本語学習者向け会話教材と会話教育をテーマとした教師用参考書を分析した。日本語学習者向け会話教材の中には機能別の単位を持つものが多く、モデル会話の提示や同じ機能を果たす表現のバリエーションの紹介だけではなく、目的を果たすための談話構造を提示しているものがある。そのような教材またはその教師用指導書、会話教育をテーマとした教師用参考書を資料とし「依頼」「許可求め」という機能が単元テーマとなっているもの、さらにそれらの中から談話構造の構成要素名が示されている資料を選んだ。そして、その構成要素をあらわしている用語（多くのテキストでは「ストラテジー」と示されている）を抽出した。

日本語会話指導用テキストは日本語会話の規範的内容が紹介されていると考えられるため、各テキストの「依頼」と「許可求め」において示される談話構造が似ているのであれば、テキスト作成者の意識においてこの二つの談話構造は似たものであるという規範的意識が存在するものと考えられる。

今回分析対象としたテキスト・教師用指導書・会話授業をテーマとする教師用参考書は以下のとおりである。

- 1) 『聞いて覚える話し方 日本語生中継中～上級編 教師用マニュアル』「第5課 依頼・指示」「第3課 許可」の単元
- 2) 『みがけ！コミュニケーションスキル 中上級学習者のためのブラッシュアップ日本語会話』「ユニット2 依頼する」「ユニット1 許可を求める」の単元
- 3) 『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』「13. 依頼」「12. 許可求め」の単元
- 4) 『ロールプレイ玉手箱』「第2課 頼む」「第3課 許可を求める」の単元
- 5) 『日本語教師の7つ道具シリーズ⑦ 会話授業の作り方編』「IV. 会話授業あれこれ 会話のあれこれ」の単元より「会話の流れを考える～許可を求める」

これらから抽出した会話の流れの「構成要素（ストラテジー）」をまとめてみると、表1のようになった。

後に述べるが、資料1)～3)は「依頼」「許可求め」のストラテジーとして使用された用語はほとんど同じであったため、同じ列として表記した。資料4)では各単元においてモデル会話が複数提示され、「表現の解説」で提示された「表現（ストラテジー）」もモデル会話ご



とに異なっているが、この表では、単元で紹介されたすべての「表現（ストラテジー）」をまとめて「依頼」「許可求め」のそれぞれの列に表示した。また、この資料では「依頼」と「許可求め」で挙げられている「表現（ストラテジー）」が若干異なっていたため、一緒にせず別の列にまとめた。表1を見ると、それぞれの資料で挙げられた構成要素（ストラテジー）には明らかに複数のテキストを通じて共通している項目がある。それを表の右端にまとめてみた。それぞれの資料で使用された用語が異なる場合は、筆者が表現を選択した。

これを見ると、日本語学習者対象テキストや指導用参考書で示される構成要素の項目は、テキストが違っていても共通度が高い。特に「事情説明」という構成要素についてはすべての資料に含まれており、許可求め行動、依頼行動ともに必要不可欠な要素ととらえられていることがわかる。

さらに、先に示した資料のうち、「依頼」と「許可」の両単元のあるテキストで、なおかつ、構成要素の順序

が示されている資料1)、2)、3) を取り上げ、両単元の構成要素の流れを比較した。1) と3) では構成要素の順序が矢印とともに示され、2) はそれがモデル会話の脇に提示されており、その行動におけるある一定の規範としての流れを示そうとしていると考えられる。その結果は表2のとおりである。

提示された「依頼」と「許可求め」談話の構成要素の流れを資料ごとにみると、共通性が非常に高い。また、構成要素の順番に大きな違いはないものの、「事情説明」と「核となる行動（依頼・許可求め行動）」だけを見ると、その前後関係については違いがあることがわかった。

先にも述べたように、日本語会話指導用テキストには日本語会話の規範的内容が紹介されているはずであり、そのような規範意識の上では「依頼」「許可」の談話構造は非常に近いものととらえられていると言えるであろう。

では、どのような理由で「依頼」と「許可求め」は談話構造の共通性が高くなるのだろうか。

表1. 各テキストや参考書で挙げられている依頼と許可求めのストラテジー

テキスト名	日本語生中継 教師用マニュアル (L5依頼・指示、L3許可)	ブラッシュアップ日本語会話 (ユニット2依頼する、ユニット1許可を求める)	会話に挑戦!中級前期からの日本語ロールプレイ (13. 依頼、12. 許可)	ロールプレイ玉手箱 [L3許可を求める]	ロールプレイ玉手箱 [L2頼む]	会話教材の作り方編 [IV. 会話授業あれこれ] 会話の流れを考える ~許可を求める	ストラテジーの種類
各テキストにおけるストラテジー紹介部分の名称	「ロールプレイのポイント」 「ロールプレイ」	「ストラテジー」	「会話の流れ」	「ロールプレイ展開例」の「表現の解説」	「ロールプレイ展開例」の「表現の解説」	「教材シート1」の「フローチャート」	
使用されたストラテジー名	話の切り出し		話しかける	話の切り出し	話の切り出し	部屋に入る	切り出し
		前置きする	前置き	前置き			前置き (お願い)
			前置き	話題提供	話題提供	話を始める	前置き (話題)
	許可を求める・依頼する	許可を求める・依頼する	許可を求める・依頼する	許可を求める・自分の希望	依頼 いいにくいことの依頼	許可を求める	核となる行動としての依頼・許可
	事情を説明する	理由を言う	事情説明	事情説明	事情説明	自分の状況を説明する	事情説明
	配慮表現を述べる	押し付けを弱める		クッション表現	クッション表現		相手への配慮
	再度許可を求める				さらに依頼		再度の核となる行動
					代案		
					確認		
	礼を述べる		許可へのお礼	お礼	お礼		お礼
		謝る		謝罪	謝罪		謝罪
				あいさつ			
		念を押す					
	あきらめる			お願い			
		会話を終える				話を終える	会話の終了
						部屋を出る	
備考			*「依頼」の単元には「お礼」の項はない		*ロールプレイの設定場面によって、このほかに「名乗る」「呼び出しのお願い」「伝言の依頼」「描写」「返す日の確認」「時間と場所の確認」「日程の調整」などが挙げられている。		

#### 4-2. 蒲谷他（1998）による依頼表現と許可求め表現の類似性

「依頼」と「許可求め」の言語形式自体を比べると、許可を求める際に「～させていただけないでしょうか」と依頼の言語形式を使って行うことがあることなどから、この二つは意味的に近い関係にあることが推測できる。

この「依頼」と「許可求め」の類似点について、蒲谷・川口・坂本（1998）は、『表現主体』が『表現意図』を叶えるための表現上の一まとまりと定義される「文話」という単位を提案し、「文話」を「表現意図」別に、①相手を意識せず自分の感情や意識を表出する「自己表出表現」、②相手に理解されるために行う「理解要請表現」、③相手に理解されその上行動が起こされ、表現内容が実現する「行動展開表現」に分類したうえで、「行動展開表現」は、だれが「行動」するのか、だれがその「行動」の「決定権」を持つのか、だれがその「行動」によって「利益」を受けるのかという点から類型化できるとした。そして、「依頼表現」と「許可求め表現」はどちらも「行動展開表現」の一つであり、「依頼表現」は、「行動」＝相手、「決定権」＝相手、「利益」＝自分（「行・A」「決・A」「利・J」）、一方「許可求め表現」は、「行動」＝自分、「決定権」＝相手、「利益」＝自分（「行・J」「決・A」「利・J」）というように、その二つの表現の類似について指摘した。

さらに、「丁寧さの原理」を「自分、相手、第三者に対して配慮すること、尊重すること、大切に思うこと」と定義し、行動展開表現における「丁寧さの原理」において、「行・J」「決・A」「利・J」という基本構造を持

つ表現が最も「敬語表現」的であり、「行・A」「決・J」「利・A」という構造を持つ表現が最も「敬語表現」的でないことを説明した。その上で、最も「敬語表現」的であるのは「許可求め表現」、それに次いで「敬語表現」的であるといえるのは「行動→相手」という点だけが「許可求め表現」とは異なる構造を持つ「依頼表現」であるとし、許可求め表現と依頼表現は行動展開表現として丁寧度が近いことを説明している。

依頼も許可求めも行動展開表現である以上、行動の対象としての「相手」が想定されるが、相手に向かう行動は常に何らかの「配慮」を基にした談話行動である。

3-2で見たように、「依頼行動」の談話では配慮によって談話構造の流れが影響を受けることが示唆されている。「許可求め行動」も、行動展開表現として機能の構造が似ており丁寧度も近いので、談話行動の際には類似の対象への配慮がなされ、その結果として「依頼」と「許可求め」は談話の構造や構成要素もある程度共通しているのではないだろうか。

#### 4-3. 許可求め行動の流れの先行研究

先に確認した依頼談話に比べると、許可求め談話の談話構造について分析した研究は数が多くない。しかし、それらの研究のいくつかでも、談話構造と配慮は関連があることが示されている。

李（2003）は工事監督者と設計士の間の会話を分析し、力関係で相対的に低い工事監督者の談話の展開パターンが「話題提示→情報の確認（→）問題点の提示→依頼・許可求め」となっており、許可求めまでに話段を数多く

表2. 日本語学習者用会話テキスト、教師用参考書で示された「依頼」「許可求め」の談話構造

種類	書名	レベル	流れ	テキストの単元名	テキスト内の項目名
教員用会話指導参考書	日本語生中継教師用マニュアル	中上級	【軽い依頼内容だと話し手が思っている場合】話の切り出し→依頼をする→依頼を受ける／断る→礼を述べる／再度依頼をする、あきらめるなど 【重い依頼内容だと話し手が思っている場合】話の切り出し→「お忙しいところ恐縮ですが」等の配慮表現+事情の説明→依頼する	第5課「そこをなんとか」～依頼・指示～	ロールプレイ (p.46)
教員用会話指導参考書	日本語生中継教師用マニュアル	中上級	【許可が得やすい内容だと話し手が思っている場合】話の切り出し→許可を求める→許可を与える／与えない→礼を述べる／再度許可を求める、あきらめるなど 【許可を得るのが難しい内容だと話し手が思っている場合】話の切り出し→事情を説明する、配慮表現を述べる「お忙しいところ恐縮ですが」など→許可を求める	第3課「これ使わせてもらっていいかな」～許可～	ロールプレイのポイント (p.28)
学習者用会話教材	ブラッシュアップ日本語会話	中上級	前置きする→理由を言う→押し付けを弱める→依頼する	ユニット2. 依頼する	依頼する表現とともに使われるストラテジー (p.25)
学習者用会話教材	ブラッシュアップ日本語会話	中上級	前置きする→理由を言う→押し付けを弱める→許可を求める→謝る	ユニット1. 許可を求める	許可を求める表現とともに使われるストラテジー (p.6)
学習者用会話教材	会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ	初級終了	1. 話しかける→2. 依頼する {事情説明1→前置き→事情説明2→依頼する} →3. 会話を終える	13. 日常生活でいろいろなことを頼む	《会話を考えよう》のページの「会話の流れ」 (p.87)
学習者用会話教材	会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ	初級終了	1. 話しかける→2. 許可を求める {前置き→許可を求める→事情説明→許可へのお礼} →3. 会話を終える	12. 日にち変更の許可を求める	《会話を考えよう》のページの「会話の流れ」 (p.81)

必要とするのに対し、力関係で優位な設計士の談話の展開は「話題提示→依頼」パターンが多く、工事監督より談話構造が単純であることを指摘した。

田中（2004）、松井・川内（2010）は、いずれも、中級レベルの日本語学習者が行った許可求めのロールプレイで見られる問題点を確認した研究であるが、談話構造に入れるべき要素とその内容についての学習者が犯す違反が、日本人母語話者としての教員や留学生関係者に違和感をもたらすことが共通して指摘されている。

これらの研究からは、許可求め談話においても、談話構造において配慮に関わる何らかのパターンがあることが示唆されるが、まだはっきりと示したものはない。

## 5. 研究目的

熊谷（1998）では、依頼談話全体を開始部、本題部、取束部にわけたうち、本題部の主要ストラテジーは「恐縮」「事情説明」「依頼」の三つである、とまとめられている。またこの結果は他の依頼場面の予備的分析でも同様の結果が得られているとする。先に見た日本語教科書の「依頼」と「許可求め談話」の単元で示される談話構造モデルにおいて、「核となる行動（依頼行動）」と「事情説明」という構成要素は全てのテキストに含まれている。本研究ではこの2要素の前後関係について焦点を当てる。

この2要素の依頼行動での前後関係についてはいくつかの研究がすでにある。熊谷（2000）は、言語行動の分析観点として「言語行動において目的達成にもっとも直接的に迫る「核」の部分が、相手に対する行動としてどのぐらいの勢いや強さ、つまりインパクトをもち、どの位置に出現するか、ということも構成の特徴づけとなる（p.107）」とし、このパターンをとらない場合もあると述べつつも、依頼行動の調査・分析において「目的達成に直接関与するはたらきかけは最後に位置することが多いという所見が得られている（p.101）」と、「核となる行動の表明」は後置されることが多いという指摘をしている。また柏崎（2000）は依頼と断りの談話について、談話展開の構成要素はまったく同一だが発現順序だけが異なる場合に聞き手が感じる印象の違いを検討した結果、依頼の場合は、状況説明と陳謝がまず述べられた上で依頼要件が談話末で出される談話が最も快いと評定され、依頼要件が初めにされる展開の談話が低い評定値になったと述べている。

これまで見てきたように、「核となる行動の表明」と

「事情説明」は「依頼談話」だけではなく「許可求め談話」の構成要素としても必要性の高いものであった。では、「許可求め談話」においても同じように、「事情説明」と「核となる行動の表明」の位置を変えることで、聞き手の印象に影響が及ぼされる可能性はあるのだろうか。

そこで、本研究では談話構造において「事情説明」を置く位置が「許可求め」行動における相手への配慮を表現する手段となるのではないかと、特に、話し手は「許可求め」と「事情説明」の前後関係を意識して選択しているのではないかと、という仮説をたて、以下のような問題提起を行う。

「日本語母語話者は、談話構造中におかれる『事情説明』と『許可求め』の順序を、配慮によって使い分けているのではないか。」

依頼・許可求め談話の構造を扱った先行研究には、談話行動を変化させる要因として、ポライトネスのFTAの重さを算出する際の変数であるP（社会的力関係）、D（社会的距離）、R（文化的・状況的負担の序列）（ブラウン&レヴィンソン 2011）を使用したものが多い。調査対象に合わせて「権限・威信」「役割」など他の要因を挙げている研究もあるが、ブラウン&レヴィンソン（2011）ではPDRは「他の概念を包含した」概念であると述べられているため、本研究でもこの枠組みに従い、「上下関係」「親疎関係」「用件の負担度」の3要素を設定する。その上で、許可求め談話において、話し手と聞き手との上下関係と親疎関係、用件の負担度が変わることによって、許可求めという「核となる行動」と「事情説明」の前後関係が適切かどうかの判断が変わるかどうかを調べ、また、その理由をさらに詳しく分析する。

## 6. 調査結果と分析

### 6-1. 調査の対象と方法

#### 6-1-1. 調査対象

2014年から15年にかけて日本人大学生1年～3年と大学職員、計36名（18歳～24歳）を対象に調査を行った。そのうち、回答の抜けがあった3名分を除き33名分を分析対象とした。

#### 6-1-2. 調査方法

質問紙を使用した意識調査を行った。許可求めの談話

表3. 調査票に使用した場面設定

場面番号	話し手	聞き手	許可求めの内容	上下関係	親疎関係	負担の大きさ
①	アルバイト生	店長	忙しいとわかっている日のアルバイトに少し遅れる	あり	親	大
②	寮生	寮生	台所に来合わせた相手からしょうゆを借りる	なし	疎	小
③	妹	姉	仲のいい姉が買ったばかりの高い靴を借りる	なし	親	大
④	課長	部下	社外キャンペーンイベント当日に休みを取る	あり	疎	大
⑤	学生	教員	休んだ日のプリントをもらう	あり	親	小
⑥	学生	教員	熱のため当日午後の授業を休む	あり	疎	小
⑦	弟	兄	仲がよくない兄の新車を借りる	なし	疎	大
⑧	友人	友人	共通の友人に借りたDVDをまた貸しする	なし	親	小

構造の要素のうち、日本語会話教材に紹介されたモデル会話などを参考にしながら、教材分析で挙げた「呼びかけ」「前置き（話題）」「事情説明」の要素が入った談話モデルを作成した。

場面については、相手との間に上下関係があるかないか、自分と相手との親密度が高いか低いか、相手にとって負担度の高い行為か低い行為かの三つの要素をそれぞれ組み合わせ、表3のとおり8場面を設定した。

調査対象者には、談話の切り出しから状況説明までの流れ（「お礼」「謝罪」など談話の収束部分はなし）のモデル会話を提示し、理由説明部分の前後どちらに「核となる行動」としての許可求め表現が入ると自然かを判断してもらい、その理由を聞いた。自然さの判断については、入る場所をモデル会話文の中に

< A > = 「事情説明」部分の前

< B > = 「事情説明」部分の後

のように記号で示した上で、「核となる行動」を示す表現を入れる位置について、

1. < A >のみ。< B >に入れると違和感がある  
=事情説明が後
2. < B >のみ。< A >に入れると違和感がある  
=事情説明が先
3. どちらでもいいがどちらかと言えば< A >  
=どちらかというと事情説明が後
4. どちらでもいいがどちらかと言えば< B >  
=どちらかというと事情説明が先
5. どちらでもまったくかまわない

の5段階のうち、1つを選択するよう求めた。その理由は自由記述を求めた。問題例は本稿末尾に示す。

## 6-2. 調査結果と考察

### 6-2-1. 条件の違いと事情説明の位置との関連

8場面について、「1. 事情説明が後」と「3. どちら

か」というと事情説明が後」の回答数の合計、「2. 事情説明が先」と「4. どちらかというと事情説明が先」の回答数の合計を、上下、親疎、用件の負担度の3条件それぞれで、JS-STAR2012 (<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/>) を用いてカイ二乗検定を行い、有意差が出た場合は残差分析を行った。

#### 6-2-1-1. 上下条件

場面①～⑧の回答について、表3に示した上下関係がある場面（①、④、⑤、⑥）とそうでない場面（②、③、⑦、⑧）の回答を集計し、それぞれ事情説明が後に来るか先に来るかについてカイ二乗検定を行ったところ、表4に示すように、有意差は認められなかった（ $\chi^2(1)=0.323, ns$ ）。

表4. 上下関係による位置の違い

		事情説明の位置	
		後	先
上下関係あり	実測値	64	63
	期待値	61.241	65.759
上下関係なし	実測値	58	68
	期待値	60.759	65.241

$\chi^2(1)=0.323, ns$

#### 6-2-1-2. 親疎条件

同様に、許可求めの相手が親しくない場面（②、④、⑥、⑦）と親しい場面（①、③、⑤、⑧）についてカイ二乗検定を行ったところ、表5に示すように、有意差が認められた（ $\chi^2(1)=1.697, p<.05$ ）。そこで残差分析を行った結果、相手が親しくない場合に事情説明を許可求め表現の後に述べる傾向が有意に高く、相手が親しい場合に事情説明を先に述べる傾向が高い（ $p<.05$ ）という結果が得られた。



表5. 親疎関係による位置の違い

		事情説明の位置	
		後	先
疎	実測値	71	57
	期待値	61.723	66.277
	調整済み残差	2.335 *	-2.335 *
親	実測値	51	74
	期待値	60.277	64.723
	調整済み残差	-2.335 *	2.335 *

$\chi^2(1)=4.878, p<.05$

+ $p<.10$  \* $p<.05$  \*\* $p<.01$

### 6-2-1-3. 負担度条件

同様に、用件の負担度が高い場面（①、③、④、⑦）と低い場面（②、⑤、⑥、⑧）についてカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた（ $\chi^2(1)=6.009, p<.05$ ）。そこで残差分析を行った結果、用件の負担度が大きい場合に事情説明を許可求め表現の前に述べる傾向が有意に高く、負担度が低い場合には後に述べる傾向が有意に低かった（ $p<.01$ ）。

表6. 負担度による位置の違い

		事情説明の位置	
		後	先
負担大	実測値	51	76
	期待値	61.241	65.759
	調整済み残差	-2.577 **	2.577 **
負担小	実測値	71	55
	期待値	60.759	65.241
	調整済み残差	2.577 **	-2.577 **

$\chi^2(1)=6.009, p<.05$

+ $p<.10$  \* $p<.05$  \*\* $p<.01$

以上の結果から、親疎条件、負担度条件において事情説明の前後の位置の選択に有意な偏りが認められたことから、事情説明を許可求め談話の先に述べるか後に述べるかということについて日本語母語話者は何らかの判断をしていること、また、その判断は許可求めを行う相手との親疎関係、また対象となる用件の負担度が影響を及ぼしていることが明らかになった。

相手が親しくないときに先に許可求めをし、理由を後に述べるという結果は、先行研究の結果から見て予想外であった。結果の理由については、次項の自由記述回答の分析を参考に後ほど考えてみたい。

負担度が高い場合に事情説明が先になる結果については、生田（1997）では、ポライトネス・ストラテジーを左右する要因として上下親疎などの人間関係要因だけで

なく、言語行為の内容、特に相手への負担の軽重、自己の利益の多少などを挙げた上で、「敬語などの表現形式の選択に現われるポライトネス・ストラテジーは、人間関係（『P』、『D』）によるものが多く、会話構成、インタラクションに現われるポライトネス・ストラテジーは、行為の負荷の度合（『R』）によるところが大きいと言えそうである（p.71）」と、会話構成と配慮の対象の違いについて言及しており、今回の結果もそれに沿っていると言えるが、同時に、人間関係要因である親疎関係もある程度会話構成に関わってくることも今回の結果は示している。

用件の負担度が高い場合、事情を先に述べておく方が配慮の度合いが高くなるということは直感的にも理解できるが、では、話し手はどのような意識でそのような選択をするのだろうか。

### 6-2-2. 自由記述に見られる傾向

それぞれの場面での事情説明の位置の選択理由について自由記述の回答から分析する。

自由記述は、回答者が上下、親疎、負担度が異なる8場面ではどんな理由で事情説明の前置、後置を決めたかを内省して書いたものである。6-2-1の結果では親疎と負担度に対する配慮の傾向が表れたが、自由記述回答でそれらの要素を理由として直接書き込んだものは多くない。ただ、それらの設定場面の条件に対して配慮した上で、どのような理由を意識して事情説明の位置を決定したかが読み取れる。

事情説明の前置後置の決定の理由として挙げられたものを意味の上で分類すると、表7のような結果となった。

分類の際、1回答に要因が二つ以上示されているものについては、以下のとおり分類した。まず、「【主要因】ならば、【副要因】なので、事情説明を前置／後置すべき」というような形式の回答が複数あったが、それらは主要因のほうだけに分類した（例：「あまり親しくないなら、言い訳を長く感じるので用件を先に」→「親疎を意識」に分類）。並列的に2要因が挙げられているものは1回答だが二つに分けて分類をした（例：「長い文だから単刀直入のほうがいい。ビジネスのことならなおさら」→前半を「用件や理由の性質に合わせる」へ、後半を「ビジネス場面の意識」へ分類）。

以下、事情説明が用件としての許可求め発話より後置される場合を「用件先」、前置される場合を「理由先」と呼ぶ。

「用件先」、「理由先」の理由を分類した結果、表7に示すように、いずれも大きくは「人間関係や場面に配慮」「発話が与える印象に配慮」「伝達効果を上げる」「バランスや流れ、言葉遣いへの意識で決定」の4項目に分けることができた。

先の杉戸・尾崎（2006）では、配慮をとらえる枠組みとして＜留意事項＞（言語行動を構成する要素）＜価値・目標＞（どのような言語行動に仕上げようとするか）＜判断基準＞（留意事項や価値目標を選ぶ際に気にするよりどころ）を挙げ、これらの下位要素を選択し組み合わせる過程が言語行動における配慮であるとした。その分類に従うならば、「人間関係や場面に配慮」は＜留意事項＞、「発話が与える印象に配慮」、「伝達効果を上げる」は＜価値・目標＞についての配慮と言える。

回答数から見ると、「用件先」では伝達効果を重視、「理由先」では発話印象を重視した回答が目立った。以下では、これらのサブカテゴリーの傾向の違いについて、より細かく検討する。

なお、「バランスや流れ、前後関係で決定」に分類された理由群については「流れが変」「こちらの方がスムーズ、自然」など、理由を明確に述べられない感覚的な回答が多かったため、考察からはずした。

### 6-2-2-1. どちらにも見られた回答

「用件先」「理由先」どちらにも見られた回答は、「人間関係と場面に配慮」のサブカテゴリーでは「親疎を意識」、「発話の印象に配慮」のサブカテゴリーでは「言い訳がましさを避ける」「ずうずうしさ・失礼さなど悪い印象を与えるのを避ける」「用件や理由の性質に合わせる」、「伝達効果を上げる」のサブカテゴリーでは「簡潔さを意識」「わかりやすさを意識」であった。

それぞれの内容を詳しく見ていくと、サブカテゴリー名は共通していても、「用件先」と「理由先」では意味合いが違うことが読み取れる。

まず、「親疎を意識」であるが、「用件先」「理由先」ほぼ同数で、どちらにおいても意識される可能性が高いサブカテゴリーであった。

ただ、「用件先」という談話構造を選ぶ理由としては「親しくないから」と「親しいから」の回答がほぼ同数である一方、「理由先」の理由としては「親しくないから」が圧倒的に多い。また、「親しいから」という回答ではなく「親しいとは言っても（用件先は変だ）」という回答が目立つ。

回答例：用件先

「親しいのならあまりいやな印象を与えない」場面①回答

表7. 自由記述回答の集計結果

#### 用件先

カテゴリー	サブカテゴリー	回答数
人間関係と場面に配慮	親疎を意識	17
	相手の忙しさへの配慮	5
	ビジネス場面の意識・責任が重いという意識	3
	会話が行われている状況の判断	1
小計		26
発話の印象に配慮	言い訳がましさを避ける	6
	ずうずうしさ・失礼さまで自分の行動が悪い印象を与えるのを避ける	4
	用件や理由の性質に合わせる	11
	自分の感情を伝える	2
	小計	23
伝達効果を上げる	簡潔さを意識	11
	わかりやすさを意識	10
	結論・重要な部分を早くしたい	16
小計		37
その他	全体のバランス・話の流れ・前後関係やことばづかいを意識/なんとなく	29
	判定不能	0
小計		29
合計		115

#### 理由先

カテゴリー	サブカテゴリー	回答数
人間関係と場面に配慮	親疎を意識	18
	上下関係を意識	7
小計		25
発話の印象に配慮	言い訳がましさを避ける	3
	ずうずうしさ・失礼さまで自分の行動が悪い印象を与えるのを避ける	12
	用件や理由の性質に合わせる	4
	相手の感情に訴える	15
小計		13
小計		47
伝達効果を上げる	簡潔さを意識	1
	わかりやすさを意識	4
	理由をきちんと聞いてもらう	6
	相手の推測・予備知識、予想を期待、利用	2
	説得力を増す	3
小計		16
その他	全体のバランス・話の流れ・前後関係やことばづかいを意識/なんとなく	20
	判定不能	4
小計		24
合計		112

合計回答数 227

「あまり話したことの無い先生には、主旨を先に伝えたほうが話がしやすい」場面⑥

回答例：理由先

「名前を知っている程度なら先に理由を言ってから借りたほうが借りやすい気がします」場面②

「いきなり貸しちゃってもいい？はいくら仲良しでも少しえ？となりそうだから」場面⑧

サブカテゴリー「言い訳がましさを避ける」がどちらにもあるということは、理由を先に述べても後に述べても、相手によっては言い訳がましい印象を与える可能性はあるということで興味深い。

回答例：用件先

「(理由が)後だとうそっぽいというかわいいわけのように聞こえる」場面④

回答例：理由先

「後から理由付け足したみたいでうそっぽいから」場面④

また、「ずうずうしさ・失礼さなど悪い印象を与えるのを避ける」については、「理由先」の方が、数が多い。両方の理由として選ばれたということは、同じ目的で「用件先」「理由先」どちらの手段も選ばれる可能性があるということではあるが、「ずうずうしさを避けたい」のような相手へのネガティブフェイスの侵害について配慮したい場合、どちらかと言えば「理由先」という手段が選ばれがちなのではない。

回答例：用件先

「(理由が先だと)休む理由がくどく聞こえてしまい、教員側から見るといいたいことは何、と苛立ちを覚える可能性がある」場面⑥

回答例：理由先

「用件を先に提示するとずうずうしい印象を与える気持ちになる」場面①

また、「用件や理由の性質に合わせる」については、用件先と理由先で明らかに内容の違いが見られた。

「用件先」で多く挙げたのは「理由が長いから」というものであった。その次は「用件に相手は直接関係がないから」という内容であった。この二つをあわせると10件の回答があった。

回答例：用件先

「遅れる理由が長いから大切なことを最初に簡単に伝えたいから」場面①

「講義式の授業を聞かないということは自分が困るだけなので、用件を先に言い、聞かれたら理由を言う」場面⑥

一方「理由先」においてはこの項目に分類されたのはすべて「切り出しにくい用件だから」という理由であった。相手にすまないの、先に用件を言うことができない、または、言うとおかしく感じるという回答である。

回答例：理由先

「少し聞きにくいことなので先に理由を言ったほうが説得力が強い」場面③

ここからは、用件や理由の内容まで吟味しながら事情説明の位置を決めていく発話者の意識が読み取れる。

最後に、「簡潔さを意識」「わかりやすさを意識」であるが、これは「用件先」の方が、明らかに数が多い。

「簡潔さを意識」については、

回答例：用件先

「回りくどいよりも先に言ったほうがいい」場面①

「先に言ったほうが簡潔」場面⑦

回答例：理由先

「理由を先にしたほうが話が簡潔にまとまる」場面④

「わかりやすさを意識」については、

回答例：用件先

「先に用件を話してから理由を述べたほうが相手に伝わりそうだから」場面①

「用件を初めに言った方が相手が理解しやすい」場面②

回答例：理由先

「自分のものじゃないから理由を言ってからのほうが相手にも誤解なく伝わりやすいと思った」場面⑧

など、簡潔さやわかりやすさを目標にした場合は用件を先に述べるべきという意識が強いようだ。

## 6-2-2-2. 「用件先」にのみ見られた回答

「用件を先に述べる」を選択した場合にのみ見られたサブカテゴリーは「相手の忙しさへの配慮」「ビジネス場面の意識・責任が重いという意識」「結論・重要な部分を早くしたい」「自分の感情を伝える」の4項目である。

回答例：

「先生は忙しそうだから要件を先に言っとく」場面⑥

「ビジネス場面で責任が重いので」場面④

「先に重大な用件を伝えたほうが良いと思うから」場面①

6-2-2-1において「理由が長い」「簡潔さを意識」「わかりやすさを意識」という回答が多かったことと考え合わせると、公的な場面だからこそ、結論を先に言う演繹的な論理構成が選ばれ、端的に用件が伝わるべきとする意識が見て取れる。これが先の6-2-1で「親しくない相手に先に用件を述べるべきである」とする傾向が有意に高かった理由の一つではないかと思われる。

### 6-2-2-3. 「理由先」にのみ見られた回答

「上下関係を意識」「相手の感情に訴える」「申し訳なさ、遠慮を伝える」「理由をきちんと聞いてもらう」「相手の推測・予備知識、予想を期待、利用」「説得力を増す」の4項目が、「理由を先に述べる」を選択した場合にのみ見られたサブカテゴリーである。以下、それぞれについて考察する。

「上下関係を意識」は6-2-1の分析では有意差が見られなかった項目である。自由記述回答を詳しく見ると、すべて「相手が目上だから理由が後」としており、「上下関係がないから理由が後」としたものはない。

回答例：

「上下関係がはっきりしている場合には理由を先に述べたほうが上の人に受け入れてもらいやすい」場面④

「目上の人に対しては理由を述べてから自分を考えたほうが良い気がする。そっこのほうが失礼な感じがしない」場面①（間違いママ）

「申し訳なさ、遠慮を伝える」という回答が多かったことと考え合わせると、下手に出て相手を納得させようとする場合には理由を先に述べるとよいという意識もどこかにあるのかもしれない。

回答例：

「高級なものを借りるときなど遠慮しているのが伝わるように最後に言うほうが良い」場面③

「申し訳なさそうに言うには最後のほうがしっくりくる」場面⑧

「理由先」で特に多かったのは、「相手の感情に訴える」というサブカテゴリーにまとめられる回答群である。

回答例：

「借りたい理由を言ってからの方が姉も気分よく貸してくれそう」場面③

「相手に同情をしてもらいたい」場面④

「演じて同情させてから用件を言ったら休めそう」場面⑥

このように、相手の感情や反応を押し量り、計算に入れて交渉しようとするような回答が目立ち、「用件先」とは異なる側面が見られた。「用件先」が論理性重視の談話構造なのに対し、「理由先」は共感重視であると話し手が意識していると言えるかもしれない。

また、談話の順序からして当然と言えるサブカテゴリーが「理由をきちんと聞いてもらう」「相手の推測・予備知識・予想を期待、利用」である。

回答例：

「先に用件を言うとすぐ断られそうだから」場面③

「理由を説明している時点で相手に推測をさせるため説得されやすいと思った」場面①

「先生は休むとは思っていないから、まずは理由から述べたほうが良い」場面⑥

理由を先に言えば必ず聞いてもらえるし、そこから用件も推測してもらいやすいという計算だが、相手の反応を予測しながら、対応に合わせながら、自分の話を組み立てていくというところが「共話的な態度」の表れとも言え、前の項と共通点がある。

以上の結果から、話し手は談話構成の決定の際、上下・親疎のような人間関係、許可求めという表現意図と負担の大きさなどの用件内容の他にも、発話の伝達効果、相手へ与える印象などを総合的に付度しながら、話し手が戦略的に行っていることが読み取れる。

## 7. おわりに

以上、許可求め談話の構造について、「事情説明」と「許可求め」の順序に焦点を当てて調査・分析を行ってきた。その結果、相手が親しいとき、用件の負担度が大きいと判断されるとき、「事情説明」を先にしてから許可求めを行うべきであると判断する可能性が高いこと、「事情説明」より「許可求め」を先にすべきと判断する場合は論理性やわかりやすさ、またはビジネス場面などを意識するなどの論理性・社会性を重視したうえでの判断である傾向が強く、「事情説明」を先にすべきと判断する場合は、相手を感情的に動かして難しい用件を飲み込ませようとするときにその傾向が見られやすいことがわかった。また、まったく同じ状況であっても、事情説明を前置すべきか後置すべきかについての判断は、人に



よって異なることも見て取れた。

そして、このような使い分けは、状況やことから、発話の相手の状況や感情、発話効果に対する配慮などに基づくものであることが明らかとなった。

この結果から考えると、許可求め談話の事情説明の位置については、どんな場合も同じであるというふうに一概に学習者に示すべきではないことが明らかである。かといって、母語話者はどちらでも選択できると思っているのではなくどちらかを戦略的に選択しているので、話し手がそれに違反した場合、聞き手に違和感を与えることは否定できない。細かい選択の基準があることを、実例をもとに説明をしていく必要があるだろう。

今回の調査は構成要素として「事情説明」「核となる行動」の関係だけを見たが、その前置後置の判断は他の構成要素からの影響も受けているはずである。それらとの関連も今後考慮に入れるべきであろう。また、今回はモデル会話についての判断を問う方法を採用したが、実際に談話を自分で完成する方法でこの内容を確かめることも必要であろう。

結果についても、今回は日本人大学生を中心とした若者対象の調査であったため、社会人の判断はまた異なる可能性がある。また、調査対象者数についてもさらに増やしていく必要がある。

先に見たように、外国語、特に中国語の談話では用件を先に述べる傾向が見られ、日本語学習者が母語と同様のやり方を日本語で取る場合に日本語母語話者に違和感を呼び起こしがちであるという研究結果があるが、日本的な談話の流れを学習者にどのように提示していくべきかなどについても、今後の研究を進めたい。

#### 分析資料

- 鴻野豊子 (2013) 『日本語教師の7つ道具シリーズ7 会話授業の作り方編』、アルク
- 嶋田和子・西部由佳・酒井祥子 (2010) 『ロールプレイ玉手箱』、ひつじ書房
- 清水崇文 (2013) 『みがけ！コミュニケーションスキル 中上級学習者のためのブラッシュアップ日本語会話』、スリーエーネットワーク
- 中居順子他 (2005) 『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』、スリーエーネットワーク
- 根本聡子・宮谷敦美 (2004) 『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編教師用マニュアル』、くろしお出版

#### 参考文献

- 生田少子 (1997) 「ポライトネスの理論 (特集ポライトネスの言語学—敬語行動の今を探る)」、『月刊言語』26-6 特集①、

大修館書店、66-71

- 池田裕・三好理英子・浅井尚子・章 奕 (2000) 「中国人日本語学習者の言語行動～日本語と中国語における依頼～」『多摩摩留学生センター教育研究論集』2、27-38
- 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグラマティック・トランスファー～『断り』という発話行為について～」『日本語教育』79、41-52
- 猪崎保子 (2000) 「『依頼』会話に見られる『優先体系』の文化的相違と期待のずれ～日本人とフランス人日本語学習者の接触場面の研究～」『日本語教育』104、79-88
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1993) 「依頼表現方略の分析と記述～待遇表現教育への応用に向けて～」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』5、52-69
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』、大修館書店
- 柏崎秀子 (1995) 「談話レベルでとらえる丁寧さ～談話展開が丁寧度評定に与える影響～」『亜細亜大学日本文化研究所紀要』1、178-192
- 柏崎秀子 (2000) 「意図の理解過程における談話展開と韻律の前触れ機能」『電子情報通信学会技術研究報告・TL, 思考と言語』100(335)、41-48
- 熊谷智子 (1998) 「依頼の言語行動におけるストラテジーの展開構造」『国立国語研究所創立50周年記念研究発表会資料集』、国立国語研究所、111-116
- 熊谷智子 (2000) 「言語行動分析の観点～「行動の仕方」を形づくる諸要素について」『日本語科学』7、95-113、
- ザトラウスキー、ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析～勧誘のストラテジーの考察～』、くろしお出版
- 謝韞 (2005) 「『BTSによる多言語話し言葉コーパス：日本語2』の解説：30.「許可を求める」(自然会話分析と会話教育：統語的モジュール作成への模索)」『言語情報学研究報告』6、東京外国語大学、118-121
- 徐孟鈴 (2007) 「依頼会話【先行部】の考察～日本語母語場面、台湾人母語場面、日台接触場面のロールプレイデータを比較して～」『言葉と文化』8 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻、219-238
- 杉戸清樹・尾崎喜光 (2006) 「『敬意表現』から『言語行動へおける配慮』へ」独立行政法人国立国語研究所『言語行動における「配慮」の諸相』、くろしお出版、1-10
- 田中奈央 (2004) 「就学生における『待遇コミュニケーション』の実態と問題点を探る～依頼・許可求め場面のロールプレイによる考察～」『早稲田大学日本語教育研究』5、125-140
- 日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育事典』、大修館書店
- 藤森弘子 (1995) 「日本語学習者に見られる『弁明』意味公式の形式と使用～中国人・韓国人学習者の場合～」『日本語教育』87、79-90
- ペネロピ・ブラウン、ステイブ・C・レヴィンソン著 (2011) 『ポライトネス～言語使用における、ある普遍現象』、田中典子監訳、研究社
- 彭飛 (2005) 『日本語の「配慮表現」に関する研究～中国語との比較研究における諸問題～』、和泉書院
- 松井咲子・川内彩香 (2010) 「中級クラスにおける『キャンセルの許可求めタスク』の実践報告」『東京大学留学生センター教育研究論集』16、71-82
- 水谷信子 (1980) 「話しことばの文法の総合的考察～ディスコース分析試論～」『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』3、1-12
- 三宅和子 (2011) 『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』、ひ

つじ書房

山口和代 (1997) 「コミュニケーション・スタイルと社会文化的要因～中国人および台湾人留学生を対象として～」『日本語教育』93、38-48

山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現～日本語語用論入門～』、明治書院

李志暎 (2003) 「ビジネス場面における＜依頼・許可求め＞の言語行動～社会的役割によってどう違うのか～」『言語文化と日本語教育』25、26-38

柳慧政 (2004) 「日韓の依頼談話の対照研究～談話構成の面から～」『社会言語科学会第14回大会発表論文集』、196-199

資料

質問紙：回答者への依頼文と問題の例

点線の中は一連の会話の最初の部分です（この部分の後も二人の会話は続きます）。

あなたなら、の言葉を、会話の流れの中の＜A＞＜B＞どちらの位置に入れますか？

あまり悩まず、直感的に選んでいただいてけっこうです。当てはまる番号に○をつけ、理由をお書きください。

また、「文法的に／表現がおかしいから」という理由ではなく、あくまでも話の流れを重視して選択してください。

① **ちょっと遅れてもよろしいでしょうか？**

状況：アルバイト生は大学3年生で、店長とは親しい。明日は普段かなり忙しい曜日で、アルバイトも自分しかない。

アルバイト：店長、今よろしいですか？

店長：はい？

アルバイト：明日のことなんですけど、＜A＞

今日と明日、4年生の卒論発表があって、3年は全員参加しなくちゃいけないんですけど、今日の様子では、明日、時間通りに終わらなさそうなんです。1時間くらい延びそうなんで…

＜B＞

- 1) ＜A＞のみ。＜B＞に入れると違和感がある
- 2) ＜B＞のみ。＜A＞に入れると違和感がある
- 3) どちらでもいいがどちらかと言えば＜A＞
- 4) どちらでもいいがどちらかと言えば＜B＞
- 5) どちらでもまったくかまわない

→その理由 \_\_\_\_\_